慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロンルド・ ミーク著 労働価値説研究 : 一九五六年
Sub Title	Ronald L. Meek; Studies in the labour theory of value. 1956.
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.7 (1957. 7) ,p.654(102)- 663(111)
JaLC DOI	10.14991/001.19570701-0102
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570701-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

ロンルド・ミーク著

『労働価値説研究』——一九五六年——

Ronald L. Meek; Studies in the Labour Theory of Value. 1956. Lawrence & Wishart. London. pp. 310.

一

本書の著者、ロンルド・ミークについてはわが国の一部ではかなりよく知られている。一九一七年ニュー・ジーランドに生まれ、ウェリントンの大学をへてケンブリッジ大学の大学院にまなび、現在グラスゴー大学の経済学講師である。担当講義は昨春帰国され、ミークと親交のあった水田洋氏によれば、価値論史（重商主義から古典派をへてマルクスにいたる労働価値説の発展）と、厚生経済学（マーシャル、ピグー、パレートからスキトヴスキー、リトゥルまで）とであるようである（水田洋氏著『社会思想史の旅』一九五六年、日本評論新社、八頁）。

ミークの専攻は経済学史、それも大体イギリス正統派経済学であるが、きわめて現代的な問題意識から出発して研究がすすめられている点に特色がみとめられる。このことは今日までに彼が発表した著書と論文とをみればあきらかである。著書はいまのところ本書ともう一つ次のものがある。

Marx and Engels on Malthus. Selections from the writings of Marx and Engels dealing with the theories of Thomas Robert Malthus. Edited with an Introductory Essay and Notes by Ronald L. Meek. 1953.（大島清、時永淑両氏共訳『マルクス＝エンゲルス　マルサス批判』一九五五年、法政大学出版局）。

この書物は副題にも示されているごとく、マルサスの人口論および経済理論についてのマルクス＝エンゲルスの記述を彼等の著述および書簡中よりぬき出して集大成したものであるが、マルサスの「古典」的、現代的意義が巻頭の緒論中においてミーク自身によって展開されている。

論文は相当多数にのぼり彼の精力的活動がしのばれるが、そのうち比較的初期の三論文が最近邦訳された。吉田洋一氏訳『イギリス古典経済学』（一九五六年、未来社）がこれである。「イギリスにおけるリカードウ経済学の衰退」（一九五〇年）、「イギリスにおける重農主義と古典主義」（一九五一年）および「重農主義と初期の過少消費説」（一九五一年）という三論文の題名からもあきらかであるように彼の初期の活動はもっぱら古典派経済学の理論的および歴史的性格の解明に向けられている。その後彼の理論的活動はやや多

面的性格をおびてきたとはいえ、中心は依然としてそこにおかれているようである。右の三論文のほか邦訳されたものはかなりの数にのぼっている。そのなかでとくに注目されるのは、「経済思想史におけるケインズの位置」（宮崎義一、渡辺昭両氏共訳、「経済評論」一九五五年四月号）である。私はこの論文と前出の『イギリス古典経済学』所収の第一論文とが、最もよくミークの問題意識の所在を示していると思う。すなわちミークの当面の課題はケインズ批判である。しかもそれを経済学史の領域においておこなおうとするものである。したがって、さしあたり、問題となるのは、ケインズの古典派批判でなければならない。古典派（リカード）も新古典派（ピグー）もひっくるめてセーの法則によるものとして批判するケインズの態度が批判されるとともにこのような観点から過去の経済学の歴史を評価し再編成しようとするケインズ派の学史家（ステットナー、セン、オリアリ、チェックランドなど）が批判されることとなる。（前記のマルサスについての編著もこの課題につらなるものである。）もちろん、こういう仕方でケインズを批判したところでケインズが完全に打倒されうるものではない。すでにこの点についてミークの論理主義的方法に対してイデオロギー批判の重要性を強調するアーロノヴィッチがおり、両者の間で論争がおこなわれている。（この論争の経過については、東洋経済新報社刊『日本経済年報』第九〇集、二二二—八頁に、私の紹介がある。）

要するにミークの研究の当面の課題が経済学史の側面からするケインズ批判であり、その方法が多分に論理主義的であるということは、本書を理解する上で重要な手がかりになると考えられる。すなわち、本書はつぎにのべるように内容的には労働価値説の歴史であるが、執筆の動機はきわめて熾烈な現代的問題意識にもとづいている。著者自身ののべるところによれば、本書は一九五一年に著者とJ・ロビンソン女史との間でとりかわされた経済理論上の若干の問題についての往復書簡にその起源をもつ。この往復書簡はついに相互理解に達しえなかったようであるが、ミークは労働価値説の妥当性についての見解の相違がその最大の障碍であることをみとめた。そこでいわばロビンソン女史をして納得せしめるために本書が書かれた。もちろんロビンソン女史だけではなく、「誠実ではあるが懐疑的な非マルクス経済学者」をして労働価値説の妥当性を納得せしめることによって、マルクス経済学者との間に平和的競争——いかなる経済学が経済的現実の正確且つ有用な分析を提供しうるかに関する——への道をひらこうとするのが、本書の執筆の動機とされている。しかしそのためには労働価値説の原理的解明だけでは充分ではない。マルクスの生存当時においてそれが有効であったのみならず、現代の独占資本主義の段階においても有効であることを証明しなければならない。そこで本書は非マルクス経済学者だけではなく、マルクスの経済学原理の発展と再適用とに関心を有するマルクス経済学者をも対象とすることとなった。（ちなみにミークがしばしば「再適用」〔reapplication〕とのべているのは、マルクスが自

己の労働価値説を『資本論』中において剰余価値、蓄積および分配などの問題に「適用」しているのに対して、商品生産の別個の発展段階にさらに適用することを意味する。）ミークによればマルクス経済学者のこの方面に対する関心はこれまで弱かった。その理由として独占資本主義時代の継続の見込みについてマルクス主義者があまり楽観的すぎたからであるとのべられているのは注目される。また他の個所で『資本論』刊行以後マルクス主義者の関心が資本主義の崩壊の問題のような労働者階級の運動に直接関連をもつ他の理論的諸問題に向けられたからであり、又三〇年代以来多くの国々の政治的状勢がマルクス主義の理論的原理の真面目な研究の発展をうながすようなものではなかったからであるとのべられている（pp. 202—3.）。

とにかく本書が労働価値説の歴史をただたどるものではなくて、マルクス経済学者と非マルクス経済学者との間の平和的競争に資すべく書かれたということに私たちは注目したい。そしてこのことがまた本書におけるミークの方法を決定的に制約していることを注目したい。というのは、本書がもともとこのような実践的ではあるが純然たる経済理論的対決を目的として書かれたために、厳密の意味での経済学史的研究としての体裁がとられていないということである。すなわち労働価値説の歴史が全然学説史的に追求されているだけであって、時代的背景（社会経済史および思想史的関連）はほとんど全くとりあげられていない。もちろんこれは対象のあつかいかたを限定して一定の効果をあげるために必要な手続であろうが、しかしこのことが純理論的な研究そのものを限界づけ、制約していることはこれを否めないであろう。例えばスミスの論理における二重性（独立生産者的側面と産業資本家的側面——この点は最近のわが国でのスミス研究の一論点である。）は、スミスの価値論について論じた第二章で事実上ほとんど問題としてとりあげられていない。総じてスミスがあまりにリカードにひきつけられて論ぜられているきらいがあるし、またマルクスと同一の平面で論ぜられている感がすることもある。（例えば、スミスの『グラスゴー講義』中の低廉または豊富論における史的唯物論の萌芽という指摘〔p. 52〕。）私はミークにおいて経済学史の対象を学説史的にのみ処理する仕方の一つのギリギリの頂点、そして同時にその限界を見出すような気がしてならない。このことはまた私たち自身の問題でもあるが、この問題——経済学史の方法という問題——についてここにしるすことはできない。ミークのこういう学風が前記のアーロノヴィッチによって指摘されたミークにおける論理主義と無縁なものではないであろう。スミス—リカード—マルクスという三巨人の価値論がそれぞれの差別においてよりも同一性において論ぜられているということ、とくにリカードが焦点の中心におかれ、マルクスすらしばしばリカード化されているということは決して学史の方法として正当なものではないであろう。そもそもこういう欠陥は、ミークがあまりにケインズ批判に性急であり、リカード経済学の復位に焦慮しすぎる傾きがあることに由来している。最も警戒しなければならぬのは、ミークがその理論活動の当初に打倒の目標としてかかげた目的論的アプローチに彼自身が全く正反対の立場からではあるが、おちいりつつあるのではないかということである。この最後の点について水田洋氏がつぎのように指摘されているのは、はなはだ教訓的である。

「マルクス主義的な研究のばあいも、事情は基本的にはかわらない。ミークにおいて、スミス—リカードウ—マルクスの発展が直線化され、スミスとマルクスがともに、リカードウ化されるのは、その一側面である。わたくしは、ミークがチェクランドの古典学派かいしゃくを、目的論的だと批判したとき、かれじしんのかいしゃくが、目的論的でないことをどう立証しうるのか、疑問におもった。『歴史』の問題が、ただしいかたちではいってこないかぎり、古典学派をケインズにむすびつけようが、マルクスにむすびつけようが、方法的にはおなじことになってしまうであろう。」（水田氏、前掲書、四六頁。）

二

本書全体の構成はつぎの目次によって示される。

序　文
第一章　アダム・スミス以前の価値論
第二章　アダム・スミスと労働価値説の発展
第三章　デイヴィッド・リカードと労働価値説の発展
第四章　カール・マルクスの価値論 (一)
第五章　カール・マルクスの価値論 (二)
第六章　マルクス労働価値説の批判
第七章　マルクス労働価値説の再適用

ミークの労働価値説の理解の仕方については、今後機会のあるたびごとに個々の問題についてくわしく検討したい。ここでは章を追ってその大意をしるすにとどめなければならない。

第一章——

ここでの課題は、古典派（もちろんマルクス的意味での）の自然価格論およびそれの分化としての労働価値説がスミスの『国富論』刊行以前にいかに準備されたかをみようとするものである。ミークは『国富論』刊行以前の価値論の系列を、(一)生産費説（教会法学者、なかんずくトーマス・アクィナス）、(二)需要供給説および効用説（重商主義）、(三)生産費説＝自然価格論、労働価値説（カンティヨン、ハリス、テンプル、ペティ、マンデヴィル、匿名氏〔"Some Thoughts on the Interest of Money in General", 1738. の著者〕、フランクリン、その他）の発展としてとらえる。このとらえかたはそれ自体として正しいと思われるが、(三)の部分のみくわしく、(一)、(二)についてはきわめて簡単にしかしるされていない。(三)の部分の典拠は、大体、マルクスの『資本論』、『経済学批判』および『剰余価値学説史』によるものであって（とくにペティ、匿名氏、フランクリンの引用文についてみよ。）、さしてあたらしく教示されると

ころはない。当然といえば当然であるが、労働価値説成立の契機を自然価格論および社会的分業論の成熟にもとめたことは正しい着眼である。むしろ第一章は、この点にしぼって詳論されたならば、もっと意義のあるものとなったことであろう。なおこの章で重農主義者に対して全然言及がないのも、私には疑問とされてならない。

第二章——

スミスの価値論は『国富論』第一篇中に展開されているが、まず『グラスゴー講義』中における価値論から説明が開始する。『講義』においては、蓄積に中心的役割が付与されておらず、また利潤の自然率の概念が存せず、もともと資本利潤と労働賃金とが区別されていない点において、『国富論』と区別される。資本利潤と労働賃金とが区別されていない点に関連してスミスの背景としての独立生産者が指摘されているが、じつはそれは『国富論』へもひきつがれるのである。ミークは『講義』から『国富論』への飛躍的前進——利潤範疇の独立化が、一七五〇、六〇年代における経済的変化の反映であるとみているが、この問題はもっともっと掘りさげられる必要があるであろう。背景への顧慮が文字どおり寸言におわっている点に前述の論理主義がしのばれるが、それがいかにミークの純学説史的研究を制約しているかは、例えば労働価値説の妥当性がスミス自身によって前資本主義社会へ制限されていたというような解釈にこれをうかがいうるであろう。スミスは単純商品生産と資本主義的商品生産とを論理的＝歴史的に混同したのである。ミークはスコットに反対してフランス旅行による影響を重視する。フランス旅行直前に執筆された『国富論草稿』は『国富論』よりも『講義』にちかいとされる（重農主義者、とくにテュルゴーの影響重視）。

支配労働価値説と投下労働価値説とがスミスの見解中に並存していることは周知のごとくであるが、ミークは前者の説明にくわしく後者についての言及が乏しい。というよりは、スミスの価値論が前者に一辺倒して理解されているきらいがある。スミスはその先駆者の見解をひきついで、社会的分業論より出発して価値論（＝支配労働価値説）を根拠ずけているということ、資本流通と商品流通との混同より一大混乱が発生するということの説明がなされているが、投下労働価値説についてはスミスに価値実体論がないためにそれへの道がふさがれていると簡単にかたずけられている。しかしのちの点については大いに疑義の存するところである。なるほど、投下労働価値説は支配労働価値説に対してある意味において従属しているとはいえ、スミスの市民社会の分析において言葉どおりには放逐されていないのであって、私たちはむしろスミスにおける価値論と自然価格論との内面的交渉を解明しなければならぬと思う。ミークはスミスの価値論におけるさまざまの基礎範疇と根本的命題とを順ぐりに検討してはいるが、それぞれの間にみられる移行と関連とについての統一的説明が欠けているように思われてならない。しかしそれには史的唯物論とは相異なるスミスの体系からくる彼の経済理論の制約が無視されてはならないであろう。全体としてスミスがあまりにマルクス化（＝およびリカード化）されて論じられているようである。不変の価値尺度論についての関心の弱さもここに胚胎している。

第三章——

スミスの価値論は費用説であって、近代理論と殆ど共通のものをもっていない。かりに彼が限界効用理論をしっていたとしてもこれにくみしなかったであろうとされる。しかし彼の価値論にはさまざまの欠陥がある。とくに彼は「価値の生産価格への転化」（マルクス）を理解しなかった。スミスの後にあらわれたリカードはどうであろうか。労働価値説史上リカードの占める位置は、スミスを克服し、マルクスへの道を準備するという点にある。しかしそういうリカードもその初期の理論活動においては、スミスの謬見——賃金の変動によって価格が規制されるとか、資本の競争によって利潤率が規制されるとかいう謬見——に立脚しており、また分配問題への適用による価値論の発展ということもみられなかった。

決定的転機が一八一四—一五年におとずれた。（その成果＝『低廉な穀価の資本利潤におよぼす影響を論ず』一八一五年）すなわち資本蓄積と利潤率との関係についての周知の根本的命題が確立されるとともに一商品の価値がもっぱら生産の難易に依存するという基本的観念が確立されたのである。『経済原論』（一八一七年）の準備過程においては、資本蓄積と分配問題との解明の用具として労働価値説を装備する必要が一層自覚された。『原論』第一版におけるスミス批判はつぎの三点に集約される。㈠支配労働価値説の排撃。労働の価値＝不変説の否定。㈡労働価値説＝初期未開の社会状態妥当説の批判。所得の変動→商品価値変動説の批判。㈢穀価騰貴→価格騰貴説の批判。と同時に資本の構成、耐久力の相違による価値法則の「修正」の問題が考慮されるにいたった。しかしこの最後の問題に関連してリカードが『原論』第三版（一八二一年）において変説したという伝統的解釈に対してスラッファとともに異議をとなえているミークの見解はきわめて正しい。このようなディール＝ホランダー以来の愚劣な解釈は、まだまだわが国の学界の「権威」たちの間において支持されているから、スラッファ＝ミークの解釈は大いに普及する必要があるであろう。ミークによれば、第三版における主要な変更はむしろ不変の価値尺度論が詳論された点にあるようである。ここまではよいとして、ミークがリカードの最晩年における価値論観を示す、あらたに発見された遺稿『絶対価値と交換価値』における不変の価値尺度の執拗な追求のうちに絶対価値概念の成熟を指示するだけではなく、一歩すすんで価値の実体概念の成立をもみとめるのはどうであろうか（pp. 117, 119-20.）。価値源泉論や絶対価値論は、そのままでは価値実体論ではない。そもそも価値の実体という問題意識が発生するためには、（絶対）価値と交換価値とが区別されなければならぬだけではなく、価値の大きさ（尺度）の問題と区別されての価値の内容規定としての質的問題が注目されねばならない。しかしリカードの関心は両方向においてきわめてよわいと考えざるを

えない。というのは、交換価値と区別されて（絶対）価値そのものが適確に、すなわち両者が区別されるだけではなく区別と同一性とをふくんだ統一的関係において理解されるためには、価値の形態や本質が理解されねばならぬのに、このような研究が（スミスにおけると同じく）全くリカードにおいて欠けているからである。

ミークには、たしかに、この点、リカードの過大評価があるようである。それはリカードのマルクス化を意味するというよりは、むしろ、根源的には、マルクスのリカード化を示すであろう。はじめにものべたようにこの点に根本的問題がある。しかし、リカードをあつかった第三章が本書中一番生彩に富んでいることは、これを否めない。『リカード全集』の新版がたくみに利用されていることも注目される。

第四章、第五章――

ミークの古典派批判に暗示されたマルクス理解のよわさは、マルクスの価値論を対象とした二つの章において明るみにでることとなるが、まずミーク自身の説明の順序を追うとしよう。ミークはリカードについてあつかった第三章の末尾で、マルクスによる価値問題解決の本質的成分はすでに大部分リカードにあったが、マルクスにあってリカードにない本質的特徴は、経済理論の問題が――価値論のような深遠な領域においてすら――単に論理の問題ではなくして歴史の問題でもあるという事実の認識であるとのべているが（p. 120）、このことは何を意味するか。マルクスの方法、さしあたり史的唯物論の独自性に注目して古典派からの前進を評価しようとするのである。そこで第四章は主としてマルクスにおける方法、史的唯物論および価値論の形成過程をあとずけることとなるが、それに先立ち冒頭で一八二三年（リカードの死）と一八四四年（マルクスの『経済学・哲学ノート』述作）との間における価値論の発展の二方向――一つはリカード価値論の俗流化とこれに反対しこれにかかわるあたらしい価値論の発生（需給説、効用説）であり、一つは急進主義者（ラディカリスト）によるリカード価値論の継承である。――が指示されている。ここでミークが急進主義者とよんでいるものはリカード派社会主義者をさすようであるが、マルクスの労働価値説は急進主義者の「控除説」＝全労働収益権思想に示されているような倫理的・政治的見解を含む（embody）ものではないが、それと結合（associate）されているとのべられている（pp. 128-9.）。これはどういう意味であろうか。本書全体を通読しても、私にはその意味が不明であった。ミークはスミスにおいて統一されていた史的唯物論（の萌芽）と労働価値説とがスミス以後、分裂することとなり、前者はジョン・ミラーによって、後者はリカードによってそれぞれ別個に発展され、それらがふたたびマルクスによって再統一されたという見解に立つ（pp. 129-30. 水田洋氏、前掲書、五四頁）。ミークの初期マルクスについての研究の部分は戦後この方面の研究のすすんでいるわが国の読者にとってさして新味がないであろう。要するにヘーゲルやフォイエルバッハの克服過程において徐々に形成された史的唯物論の立場

から古典派経済学が摂取されたために、価値論においても、古典派の労働価値説がのちに『資本論』において止揚される契機が徐々に成熟しつつあったことが指示されている。とくに「疎外された労働」と「商品の物神性」とのつながりが指示されている。また、マルクスの経済学の方法として「論理的＝歴史的方法」（logical-historical method）や、生産の観点についてややまとまった記述がある。それらがマルクスの方法としての弁証法的唯物論および史的唯物論の帰結であることはいうまでもないが、ミークが生産の観点に関連して、生産関係が交換関係を決定するということを強調し、そこに価値論の存在理由を見出しているらしいことは注目されよう（pp. 156, 287, 298.）。この見解はドッブと共通である。

だが、元来、マルクスの史的唯物論や方法が本書において問題とされるのは、価値論との関連においてであるはずである。この点の具体的解明こそ、『資本論』中の価値論を対象とした第五章に期待されたが、私たちの期待は充分にみたされたとはいえない。そこでは商品分析のかなりくわしい説明や、価値論がいかに剰余価値論、生産価格論などに「適用」されたかについての説明はみられるけれども、価値論の基礎的範疇について史的唯物論がいかに具体化されているかのたちいった説明はみられない。価値の形態や本質についてのマルクスの問題意識（これは古典派には全く存しなかった。）が史的唯物論とつながることの解明こそ最も必要とされるが、価値形態論や物神崇拝論についての記述は他の部分に比しておどろくほど乏しい（pp.173-6.）。ミーク自身、価値形態論（や価値本質論）の意義をどの程度理解していたかについて疑わしく思うほどである。だがそれにとどまらない。価値の実体論についても実質的には同じようなことがいえるのではなかろうか。（前述のこの点についてのリカードの過大評価をみよ。）とすれば、価値の尺度論についても……ということになってこないともかぎらない。（私見によれば、価値論の構造は、本質論→形態論→実体論→尺度論という一つの系列において有機的全体をなしていると考えられるからである。さしあたり、拙著『古典派経済学とマルクス』第八章参照。）まえに私の言及したスミス、リカードの研究におけるミークの切りこみの浅さは、ここに起源をもっているし、また逆にいえば、マルクスのリカード化を結果したということにもなるであろう。

なお第五章のおわりの部分（pp. 191 ff.）でとりあげられている、いわゆる「転形問題」（transformation problem）は、現在イギリスで論争問題となっており、ミーク自身それに参加しているので、これについては別の機会に私見をのべたいと思う。

第六章――

一八九四年に『資本論』第三巻が刊行されたが、その当時においてはマルクス主義はヨーロッパの指導的社会主義政党の公然の教義となっていた。爾来今日にいたるまで労働価値説に対する批判はくりかえしおこなわれたが、ミークはそのうちから最も円熟した智的なものをえらんで、三つの類型に分類する。第一の類型（純粋ボエ

ーム・バヴェルク的攻撃の類型）。ここではボエーム自身ではなくこの類型のローザンヌ的変型としてのパレートがとりあげられている。おそらくボエームの批判はあまりに有名であり、本書中の他の個所でしばしば言及されているからであろう。この類型はある種の価値論が経済学の一般的理論体系の基礎として必要であることをみとめるが、マルクス価値論は事実と一致しない役に立たぬ理論であり、したがって又彼の全体系はこれによって崩壊するとみる。第二の類型は、第一の類型と同じく価値論そのものの必要性はこれを否定しないが、マルクス価値論は無効であるとする。しかし、これによって彼の体系がただちに崩壊するとはみない点で第一の類型と異なる。すなわち、㈠マルクス価値論が限界効用理論によってとってかわられるか、あるいはこれと和解されることによって彼の体系は支持されうるとみたり（その代表者＝修正主義者・ベルンシュタイン）、㈡マルクス価値論は他の価値論がその属す体系において演じるのとは全く異なる役割を演じているとみる（その代表者＝リンゼイ及びクローチェ）。第三の類型は第一、第二の類型と全く異なり、従来の伝統的意味での価値論をすべて否定する。マルクス価値論についていえば、それは彼の体系における無用且つ有害ですらある贅物であるとみなし、その論証につとめる（その代表者＝ランゲ、シュレジンガーおよびロビンソン女史）。

ミークの論述は第三の類型の部分がくわしい。しかしいまここでそれを紹介する余裕はない。一言するにとどめる。ランゲはマルクス経済学においてすぐれた点を経済発展の理論を提供した点に見出し、労働価値説はむしろ一般経済均衡の静態理論にほかならないから、ブルジョア経済学に対するマルクス経済学の優位の源泉たりえないとする。ミークはこれに対して、マルクス経済学にはランゲの考えているような静態および動態の区別は存しないという。ちなみに、ランゲを批判した個所で、ミークが近代経済学を全面的には否定せず、マルクス経済学よりもすぐれた理論活動を示している領域の存することをみとめているのは注目される（p. 228）。シュレジンガーの批判はマルクス価値概念を独自に解釈し、その価値論における質的局面よりも量的局面がより一層不安定であるとみなす。ミーク自身はシュレジンガーが価値問題の質的局面に一般の関心をひきつけた点にその功績をみとめながらも（じつはミーク自身の理解においてもこの方面が薄弱であることは、彼自身これをみとめているようである）、量的局面の重要性を主張する。ロビンソンの批判は要するに労働価値説は神秘主義であり、呪文であるということであり、積極的にはこれにかわりうるものとしてケインズの労働単位論が支持されている。この批判はシュレジンガーのそれと正反対に、価値問題の質的側面を全く無視するものである。マルクスの価値概念は労働単位論で考えられているようなハンディな計算単位を提供するためのものではない。ケインズにおいてはマルクス（やリカード）にみられる総生産物の諸階級間への分配問題が存しないし、又相対価格論も存しない。労働価値説の存在理由はこれらの問題の解明の基礎となる点に存する。ミークはとくに価値論の存在理由を分配論の基礎原理たる点に見出し、これをしばしば強調している（pp. 229-30, 232, 236-7.）。この見解はドッブと共通である。

第七章――

ミークはもちろんマルクスの価値論がすべての点で完全無欠であるとは考えていない。現在あたえられている価値論は、商品生産の発展のある特定の段階、すなわち競争的資本主義の段階の分析を本来の目的としている。マルクス価値論は、前資本主義、独占資本主義、および社会主義の段階にも適用されねばならないのであって、きわめて多くの仕事がのこされている。この適用はマルクス主義者の本来の義務であるとのべられている（pp. 241-2.）。その意味でミーク自身によるマルクス価値論の独占資本主義および社会主義の段階への「再適用」が展開されている第七章は最も注目されるが、ここではむしろ「再適用」のためのきわめて基礎的な知識がマルクス、エンゲルス、レーニンおよびスターリンなどの典拠にもとづいて展開されているだけであって、いまだにその具体化というところまでいっていない。しかしこれは――とくに独占資本主義下の価値法則の問題において――ミークだけではなく国際的な理論戦線のたちおくれを示すものであって、ミークのいう平和的競争――それがかりに可能であるとして――のためにも大いに反省を必要とするところであろう。

私としては、むしろ、第七章の第一節で限界革命の意義やマーシャルの位置を論じたり、また近代理論における価値論観に言及した部分が大へんおもしろかった。この書物の中のリカードの部分に次いで最も生彩に富んだ部分ではなかろうか。――一九五七・五・一四

（遊部　久蔵）

クロンロード

『社会主義的再生産』

Я. А. Кронрод: Социалистическое Воспроизводство, 1955. стр. 368.

社会主義社会の経済循環がいかなる原理にもとづいておこなわれているのかを、明らかにしたいということは、ソビエト経済学者の多年の試みであった。経済循環を明らかにすることによって、経済計画の方法が明確になるという点にある。このような再生産論・バランス論をめぐる問題は、わが国でも既にいくつか紹介されているので参照していただきたい。ただ現在、再生産論の問題は次のような観点から研究されていることを指摘しておこう。

第一はマルクス学説の再生産理論を社会主義社会に適用しようとすれば、それはいかなる形態をとるかという点である。

第二に社会主義社会の国民所得の概念・生産・分配・利用の問題がある。

第三は基本的経済法則・計画的・均衡的発展の内容の問題である。